

十四五日にあたる日の夜の月は、望のきはみなり、

十四五日はとをかあまりよかいつか 望はもちもちとは満てふ意にて、月の満たるをいふ名なり、中旬のあひだみながら、空の月まさしく圓にはあらざれども、缺たる所なく、やゝみちたれば然いふなり、さて今望の極みを十五六日といはずして、十四五日にあたる日といへるは、上つ代の朔は、曆の二日三日ごろなればなり、さて伊勢物語に、そのころみな月のもちばかりなりければとあるは、中旬をひろくいへり、六月へかけていへるは、後の詞なれど、中旬をもちばかりといへるは、古の言ののこれりしなり、又萬葉集三の巻の歌に、富士の嶺の雪の事を、六月十五日に消ぬればとよめり、空の月の事ならで、十五日をもちといひしは、これも古言なり、

さて末十日ばかりがほどを、月隠といへり、月のやうくくりに隠り行ほどなればなり、その中に三十日ごろにあたる夜は、月隠のきはみなり、

月隠はつごもり 此ほどは、月の出ることおそくなりて、やうくくりに見ゆることすくなくなりゆく故に、月ごもりといふ、つごもりは月隠の意にて、月のかくれて見えぬをいふ名なり、さて曆法に依て見るに、天の月の一めぐりの來經は、廿九日六時あまりにて、廿九日にはあまり、卅日にはたらざる故に、卅日と定めて見れば、月の出入時の、先の月よりは遅くなりて、二月のほどには、おほかた一日たがふ故に、曆には大小の月を分て、二月に一月をば廿九日として、晦朔をとゝのふる事なれども、皇國の上代には、すべて日數にかゝはらざりし故に、たゞ空の月を見て、朔のはじめを、一人は今日ぞと思ひ、いまひとりとは昨日ぞと思ひ、今一人は明日ぞとおもひて、心々に定めても、みな違ふことなかりしかば、大小を分ざれども、晦朔のみだれ行ことなかりき、